

書評

山下英次 著

『日本よ！歴とした独立国になれ！』
れつき

(ハート出版、一八〇〇円十税)

評者 渡辺利夫 ■ 拓殖大学顧問



「米国の壮大なる愚行」の物語である。現代の世界をかくもおぞましき憎悪と恩讐、対立と敵対に満ちたものとしたのは、かのフランクリン・ルーズベルト大統領の思想と行動によつてである。東京裁判と称され、GHQ史観と呼ばれる米国の戦勝国史観も、由来は指揮官ルーズベルトの愚かなる人間観、世界観から生まれたものである。米国の不正な戦勝国史観を糾明すべきは、その最大の被害者である日本人だという憂国のメッセージが本書のものである。

「第二次世界大戦で、米英はことあるうちに、共産主義の全体主義的独裁者であるスターリンと組むことにした。そもそもこれが初歩的かつ根源的な間違ひである」。なぜことがそうなったのかといえば、この大統領の共産主義に対する警戒心がきわめて希薄だったからであり、第二次大戦後の世界は米英ソ中の四国によつて分割支配するという異様な構想をルーズベルトが隠しもっていたからだと著者はいう。

この時代の米国は大恐慌からの回復に呻吟していた。ルーズベルトは脱却の道をヨーロッパとアジアにおける最強の資本主義国ドイツと日本との戦争に求めたというのである。「本来、自由主義陣営にとって一番の敵と組んでしまったがために、本来の敵である共産主義者に勝利の果実の多くを奪われてしまった」のだという。なぜそんな錯誤の行動に出たのかといえば、「ルーズベルトの場合、スターリンに騙されたというよりも、途方もない勘違いの下に、スターリンを何か新しい世界体制を共に築くことができる相手とも思い込み、自分から進んで騙されに行ってしまった」といふことができないか。これが著者の推察である。

今後の世界がどこに向かうのか。どう考えても調和的で協動的な未来が待っているとは思えない。中国、ロシア、北朝鮮という極端に強権主義的な核保有国に囲まれている日本は、世界で最も戦争リスクの高い国だと考えねばならないのだが、日米同盟に守護されている日本に彼らが容易に手を出すとは考えられない、というのが平均的日本人の日常感覚なのである。本書の冒頭にはオランダのティルブルフ大学に拠点を置く「世界価値観サーヴェイ」の調査結果が掲載されている。これによると二〇二一年において世界七十九カ国の中で「一国のために戦いますか」という問いに対し「はい」と答えた日本人の比率はわずか一三・二%、なんと七十九カ国中最低であった。この異常さは何を物語るのか。

GHQによつて植え付けられた「ウォー・ギルト・インフォメーション・プログラム」という一大洗脳工作の明らかなき残像であろう。GHQによる日本占領が終わり、サンフランシスコ講和条約が発効して日本は改めて独立国となったはずなのに、今度

は日本人自身の手によつてGHQより一段とGHQ的なるものが日本人の心の中に埋め込まれてしまったのである。今の時点でGHQ史観を克服する気概をみせずして日本がこの世紀を生き延びることは難しいという感覚が、本書の書名に色濃く反映されている。